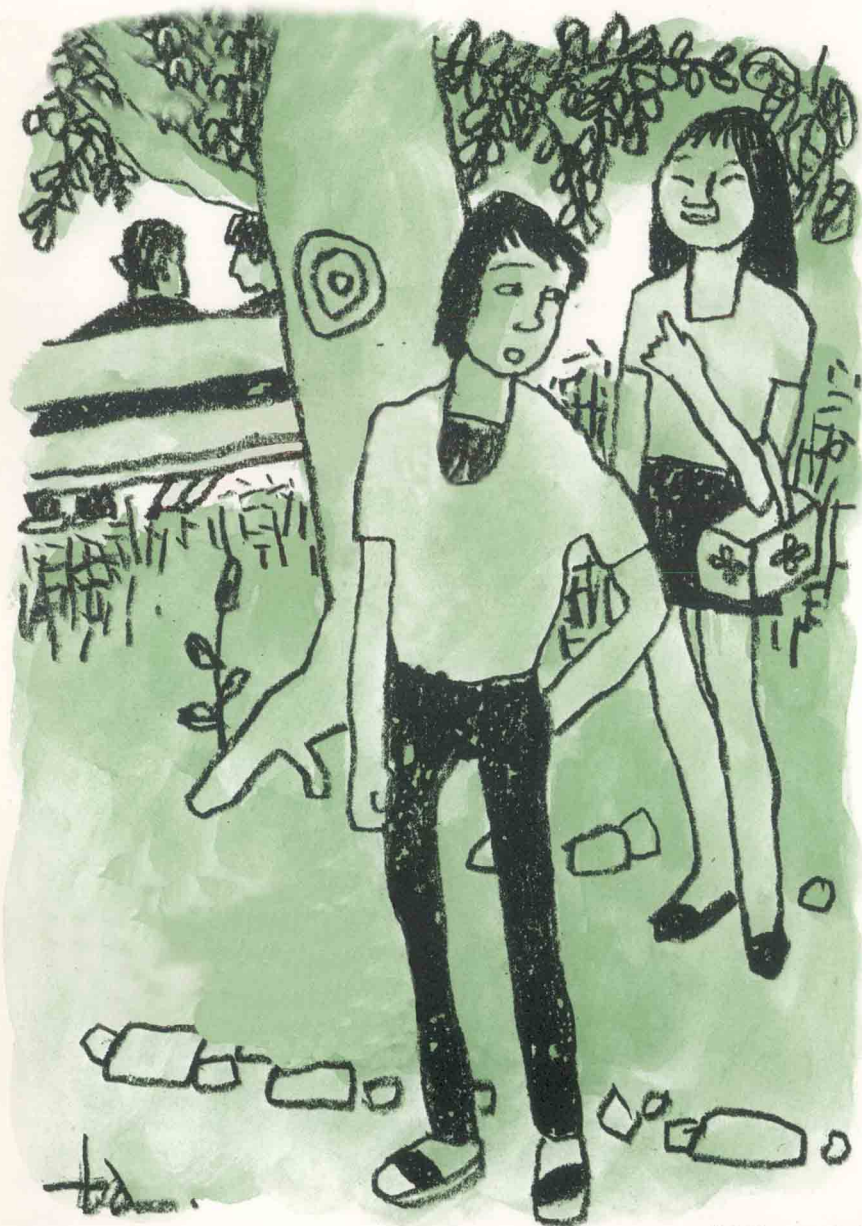


曾野綾子

太郎物語

太郎物語

曾野綾子



新潮社版

たろうものがたり
太郎物語

一九七三年七月二〇日発行
一九七八年二月三〇日一二刷

著者 曾野綾子
そのもと

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話 業務部 〇〇三三六六五
編集部 〇〇三三六六五
一四一一

振替 東京四一八〇八

三晃印刷、神田加藤製本

定価 八五〇円

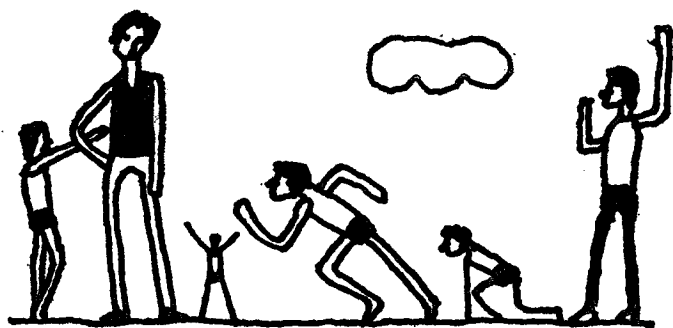


© 1973 Ayako Sono
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

太郎物語・目次

第一章	青春の朝	7
第二章	身上相談	26
第三章	釣人の心境	46
第四章	春の渚	65
第五章	秘密の猟場	84
第六章	犬の床屋	104
第七章	椰子と情事	122



第八章 お茶の時間・142

第九章 町の匂い・161

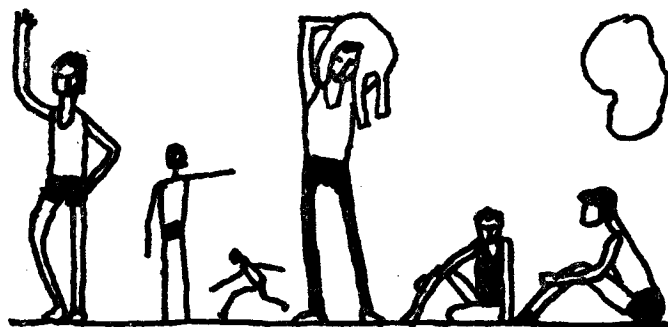
第十章 十八歳以上お断り・181

第十一章 藍色の午後・199

第十二章 果物の大皿・218

第十三章 不安定・239

第十四章 そして誰もいなくなった・258



装
幀・宮田武彦

太郎物語

第一章 青春の朝

1

高校二年生の山本太郎は、世の中の大いのに機嫌きげんのいい、典型的な都会っ子だが、一つだけときどき気分によって、氣にくわれないものがあつた。

それは自分の名前なのである。

山本太郎の父親は大学の教授で、息子の名前についてきかれる度たびに、

「はあ、随分、いろいろと考えました末、太郎にしました」

などというものだから、中には、

「まあ、大学の先生がさんざんお考えになつた挙句あげく、太郎だなんて御冗談ばかり」

と相手にしない人もいるかと思えば、

「本当に珍しいお名前ですわ。この頃、人間には珍しいのよ、本当。太郎って言ったら犬の名前ですわよ」

と、はつきりいう人まで出る始末であつた。ところが、父親の山本正二郎は、どこか間が抜けたような人物で、相手の皮肉も嫌味も、全く気づかぬかのように、

「はあ、太郎というのは、いい名前だと思います。第一、どんな職業にでも向きますからね。ラ

「メン屋の主人、役人、郵便局員、おわい船の船頭、代議士、役者、それはもう、何になってもおかしくない名前です」

などと真顔で言うものだから、誰もが二の句がつけなくなるのである。

太郎は、自分の名前にあまりいい記憶を持つたことがない。女の子が馴々しく「タロちゃん」などと呼ぶと、それこそ犬になったような気がする。上級の女の子などが、「太郎がねえ」などと言っているのを聞くと、「へっ、そんなに気やすく言うな」という気にもなってくる。

師走しその或る日、山本太郎は、学校の帰りに、カバンを下けたまま毎朝、行き帰りにその前を通る銀行へ入って行った。

「普通預金の通帳を作ってほしいんですけど」

太郎は言いながら、ズボンのポケットから綿ゴミと一緒に、中国製百五十円也の小銭入れを出した。

「五百円預けるんでもかまいませんか」

「はあ、結構でございます」

口では、結構といいながら、幾分迷惑そうな行員の顔を、ざまあみろ、という思いで見返しながら、太郎はしかし、決してそれを表情に出しはしなかった。

「では、恐れ入りますが、ここに御住所とお名前と御印を頂戴したいのですが……」

「あ、そうですか」

太郎はさらさらと書いた。

「大田区D町一ノ二ノ三 山本太郎」

これがお役所用の用紙になると、更に、

「昭和三十年一月二十三日生れ」

となるのである。そこに書かれている住所も生年月日も総て本当なのだが、大ていの人は、あまりにも一、二、三、とゴロが合い過ぎて数字と名前に明らかに疑わしげな表情を示す。その日も行員は、

「あのお、見本の名前ではなく、本当の御自分のお名前を書いて頂きたいのですが」

と注意した。この銀行ではクレジット・カードや、預金通帳の見本に、山本太郎という名を使っているのである。

「見本じゃありません。本名です」

「あ、そうですか。どうも、失礼しました」

この一言を相手に言わせたいために、これで少なくとも一日は、常に乏しい小遣いの一部の五百円というものを釘づけにしたのだ、と思うと、太郎は自分がしみじみばかりになって来る。

それにしても、山本太郎という名前から来るイメージは、それほど日本人の平均値的匂いがあるのだろうか。

恐らく、山本とか、渡辺とか、佐藤とかいう、どこにでもありそうな姓を持つ人は、名前には太郎などという平凡なものは避けるようにするのだろう。太郎も、時々、自分が、重信とか、明久とか、義成とかいう重々しい名前だったらどんなにいいだろう、と考えることがある。太郎なんて、第一、幼名じゃねえか。

太郎が、親爺おやぢの趣味を、まあ仕方ないや、と思えるのは、父親の命名の好みの中に、平均値的日本人になってほしい、という望みを感じるからである。

山本太郎は、小学校一年生から、学区の小学校に入れられた。小学校までは、歩数で計ってみ

ると四百五十三米であつた。小学校が終ると、又もや学区の中学校に入れられた。今度も歩数で計ってみたら、四百八十六米と出た。一足あたりの歩幅は、中学になって伸びた分だけ、ちゃんと修正してある。

「お父さん、僕いやになっちゃうよ」

「何だい」

山本正二郎は寝転がって読んでいた本から目を上げて言った。太郎の印象では、親爺というものは、いつも本を読んでいるが、ただしそれは寝転がってである。その辺の光景がテレビ・ドラマに出て来る知的できちんとした大学教授の家と大いに違う。

「五十歩、百歩って言うでしょう」

「何がだよ」

「僕の小学校と中学さ。僕のうちから小学校までの距離と、中学までの距離とさ。ほんとに五十歩くらいしか変わらないんだからさ」

「けっこうな話じゃないか。運動靴が減らなくていいよ」

「ああ、オレは定期券持って通学したいよう」

太郎は喚いた。

「いつ迄経っても、テクだぜ。越境組はかっこいいわア。定期券持ってさあ、定期ありや、釣り堀行くのもタダだしなア」

「高校へ行ったら、多分定期持てる」

山本正二郎は一言で片付けた。

人間が平凡な生活から出発すること。平凡な生活の中から、学び得るものを引き出す癖をつけ

ること。たとえ他人より少しでも秀でたところを持ち得たとしても、人間としての謙虚さを失わないこと。タダの人間、タダの太郎であるという思いを片時も忘れないこと。それがオヤジの好みなのだということを、太郎はよく知っている。

もっとも、太郎はそんなことを、改まって父親から言いふくめられたことなど一度もない。一軒の家にいて、普通に喋っていれば、それくらいのことには、いつの間にかわかつていく。

しかし、平均値的日本人などというものは、本来あり得ない。言語的、概念的にはあり得ても、平均通りの総ての要素を兼ね備えている人間などというものはあり得ないのである。

山本太郎は、銀行を出ると、地下鉄の駅へ出た。東京の高校には、学校群という制度があつて、今通っている学校へは、割り当てられたのである。太郎の高校は学校群制度以前の女子高校であつた。今でも、人数から言うと、女子の方が、三対二ぐらいの比率で多い。本当はそこへは行きたくないのだ。初めて、割り当ての結果を知った時、

「ひやあ、女便所ばかり多いんだらうな」

という感じであつた。行つてみたら、そんなこともなかった。

次は校章がちよつと気に入らなかつた。昔の女子高校の時からそのままだから、撫子の花のデザインであつた。太郎の母親は、男のように荒っぽいところがあるから、息子がひそかに気に入っていることを決して避けてくれない。

「ふうん男のくせに、撫子学園だね」

と真顔で感想を述べた。そう言われてしまうと、逆に少し気にならなくなった。

「いいもんね。美人がいるもんね」

と自ら慰めた。まだ美人がいるかどうか、調査する迄、手がまわりかねていた頃である。とに

かく高校生になったお陰でやっと、定期券が買えた。

太郎が地下鉄に乗り込むと、後ろから飛び込むように駆け込んで来る気配があった。と同時に、ふっといい匂いがした。

石鹸の香り、だけでもない。それに健康な素肌の匂いがちゃんと混っている。

太郎は振り向いた。一年上級の、つまり三年の五月素子^{さつきもとこ}さんだった。

「あ」

太郎は、瞬間的にぱっと身を引いて、五月さんが乗り込みいいようにしてやった。五月さんは、軽く息を切らしている。おくれ毛が額に散っている。太郎はそれを見下ろしながら感動した。

「今日は、こっちですか？」

太郎は尋ねた。

「四月から引っこしたのよ」

五月さんは言った。

「どこへ？」

「J町」

「じゃ、すぐ近くだな」

太郎は、五月さんが美人だと思った。色は白くないが、はっきりした目鼻立ちをしている。五月さんは太郎が一年生のとき、茶道部の部長をしていた。

「僕、うちの学校へ入りたての時、実は茶道部へ入ろうと思ったことがあるんです」

「そう？」

五月さんは疑わしそうな表情をした。

「どうして、茶道部なんて入ろうと思ったの？」

「お菓子が食えると思ったからなんです」

「お菓子、出たでしょう？」

「ええ、あれはなんているのかな、ほら、さつまいもを細く切って、砂糖にまぶしたのあるでしょう。あれとか、豆とか。豆は食べにくいですね。畳に落したのを拾いに行ったら、オコられるし……」

「それでやめたの？」

「いや、そうじゃないんです。山田さんておられるでしょう。山田初枝さん。あの人に、僕言われたんです」

「何て？」

「男なら、運動部へ入りなさいって。それでね、僕もその通りだと思ったもんですから、やめたんです」

「山田さん、よく見抜いてたじゃない？」

「はあ、そう、かも知れませんが。僕、その時、五月^{まつき}さんのことを、ゴガツさんと言って、山田さんに叱られました」

五月さんはおかしそうに笑った。

「ゴガツはサツキじゃない」

「はあ、それはそうですが、しかし、僕はあんまり、文学的なほうじゃありませんから、ゴガツはゴガツです。鯉のぼりの泳いでる五月です」

五月さんはおかしそうに笑った。太郎はふとその笑顔が、彼の心臓に近づいて来るように思った。

山本家は、この頃流行の核家族ではない。古い家に太郎の祖父母も一緒に暮しているのである。ただし太郎には兄弟はない。太郎はいわゆる一人っ子である。

太郎の母親の山本信子は、戦前、商社員だった両親と共に、ロンドンで暮したことがある。そのために少し英語ができるので、翻訳家として多少名前が知られている。といってもディケンズや、ジョイスやフォークナーを訳しているのではない。彼女は、もっぱら探偵小説の翻訳をしているのである。

その日も、太郎が帰ると、母は食堂の一部におかれた書物机に向って、近眼鏡をかけ、背を丸めて、せつせと、原稿用紙のマスを埋めていた。

もう何年来となく見馴れた光景であった。

「お帰り」

母は、今日は何があった？ などとは聞かない。昔から聞かないのである。太郎が喋れば聞^{しゃべ}くが、仕事に熱中していると、彼女はそんなことに気が廻らないらしい。

「お母さん」

太郎は言った。

「僕、ラーメン食べるけど、お母さんお茶いれてやろうか」

「うん」

「お菓子は何を食う？」